宮城県文化財調査報告書第十三集

新産業都市指定地区

埋蔵文化財緊急発掘調査等報告書

宮城県教育委員会

はじめに

新産都市建設促進法（昭和三十七年五月十日法律第百十七号）にもとづく仙台湾地区指定にともなう開発計画に対処し、計画予定地内に所在する各遺跡の保存に資するため、別掲のとおり遺跡緊急調査対策委員会を組織し、各委員のご協力を得て、分布調査を行なつてまいりましたが、開発の進展による同地域内の一部遺跡が破壊されることにより、その記録保存のため国庫補助金を得て当委員会が主体となり緊急発掘調査及び緊急調査（測量調査）を行ないました。

この調査報告書は、その結果の概要を刊行するものであります。

最後に、調査に当られた各位並びにご協力いたゞいた関係者に対し、深く感謝の意を表します。

昭和四十二年三月

宮城県教育委員会教育長　二瓶　保

目　次

Ⅰ　西ノ浜貝塚緊急発掘調査概報……1
Ⅱ　西ノ浜貝塚緊急調査概報……35
Ⅲ　三十三間堂遺跡緊急調査概報……37
Ⅳ　遺跡緊急調査対策委員会委員名簿……57

Ⅰ　西ノ浜貝塚緊急発掘調査概報

一　遺　跡　名　　宮城郡松島町磯崎字西ノ浜十の一、十一の一所在貝塚

二　調　査　期　日　　自昭和四十一年八月十二日
　　至昭和四十一年八月二六日

三　調　査　者　　宮城県教育委員会

四　調　査　担　当　者　　日本考古学協会員　宮城学院女子大学助教授　加　藤　　孝
　　〃　　塩釜女子高等学校教諭　後　藤　勝　彦

五　調　査　補　助　者　　伊具郡大内小学校教諭　斎　藤　良　治
　　東北大学附属小学校教諭　槇　　要　照
　　宮城郡七ケ浜中学校教諭　丹　治　英　一
　　塩釜女子高等学校　社　会　部　員

六　調　査　概　要

一　まえがき

西ノ浜貝塚は松島湾内貝塚群の中で、七ケ浜町大木囲貝塚、宮戸島貝塚、西ノ浜貝塚とならび称される環状貝塚で東北地方でも大貝塚の部類に属するものである。

当貝塚は昭和三十四・三十五年の再度にわたり筆者らによつて調査され、特に、台地東斜面、南西斜面及び南東部の平坦部を調査、その結果、縄文式文化後期末から晩期初頭の標品を多数採集し、又、南東部からは東北地方最初の奈良朝期製塩址が検出されるなど、当貝塚が縄文中期から歴史時代

へ長期にわたり使用されたことが立証され、当貝塚の重要性が再確認された。

ところで、昭和三十八・三十九年の建築ブームに乗つて、本遺跡の台地上が分割され、宅地として売買されて、舌状台地の先端部は住宅が建築されて変貌してまつた。このことは、埋蔵文化財の分布調査によつて、あらためて本遺跡の破壊変貌が注意された。

新産都市計画の推進とともに、新産都市内の開発に対処するため「遺跡緊急調査対策委員会」が設置されて、本遺跡の変貌が問題となつた。

その後、特に仙台市二日町二十六、茂泉清一氏所有地で土砂流出防止のための土留め工事を実施した上に、会社の保養所建設の動きを知り、また、仙台市北八番丁雨宮八六、桔梗茂子氏所有地が小中学生の盗掘にあつて崖が崩れ、処置したいが、貝塚という文化財であるため、どのようにしたらよいかの良心的な申出などもあつて、委員会として、昭和四十一年度の緊急調査として、遺跡の現状を記録するための地図作成と事前調査を実施することになり、その調査を筆者らに委託された。

付　記

本調査に関しては特に松島町役場及び同町教育委員会の方々の種々の御援助、御配慮があったこと、感謝申し上げる。

二　貝塚の位置　（第一図）

西ノ浜貝塚は日本三景、松島の中心である仙石線「松島海岸」から北東へ約二・五粁、東北本線「松島」駅から東へ約二粁の地点にある。仙石線「高城」駅から南海岸沿いに磯崎部落があり、この部落の北側を海岸沿いに東にのびる標高約十米の丘陵（館ヶ崎丘陵）があって、部落より東に約五百米、この丘陵から南へのびる分枝の舌状台地が海岸にせまっている。この台地一帯が貝塚となっている。

この台地は西側は急傾斜になっており、南西側から南東部が緩かな勾配になっている。台地の中心部で標高十一米である。

貝塚はこの台地の十米以下に構成され、東と南西斜面に厚く堆積された。西斜面は急傾斜のため貝散布なく、その崖下の標高一米程度の山沿いに多少貝殻と土器片が散布しており、一応環状貝塚ということができよう。貝殻散布の範囲は東西百三十米、南北二百米におよんでいる。

当貝塚は今回の調査と以前の調査、表面観察から東斜面の北から南へと順次移動し、西斜面へ移動してまた、東斜面の南東部に帰ってきたようである。その後、弥生期から奈良・平安初期頃までは南東部から南西部の低地が主たる生活舞台になつたようである。

現在、この舌状台地は九区画に分割されて、それぞれ所有者が別々である。現在四戸が建築されているが、将来、次々と新築される予定である。

三　調査の概要　（第二、三、四図）

調査には現段階において相当の課題・検討しなければならない問題があるが、調査は次の二点にしぼって特に検討することにした。

① 各文化期の編年学的究明

② 住居跡の検討＝住居面の検出

しかし、これらの目標は一回限りでは到底達成するわけでなく、それに、調査範囲が広いためにも今年度だけでなく継続調査となることも考慮して調査を実施した。

まず、台地上に東斜面と併行に巾二米、南北三十米のトレンチを設定し、南より一―十五と命名し、なお、三区ずつ区切って五地区に分けて調査することにした。このトレンチをAと呼び、このトレンチを中心として調査を拡大していった。（第二図）

このAトレンチは貝層といっても混土貝層が厚く、それもやや北東に傾斜していた。貝層は三層確認されたが、特に、第三貝層は非常に薄い。A1の部分から焼土が検出された外に、南壁に近い部分に直径二十糎ほどの黒土のピットがあり、この部分から晩期初頭大洞B新式併行の土器が出土した。このピットの性格を究明するにいたらなかった。

また、A11の混土貝層から土層にかけて人骨が出土した。頭骨は下顎骨のみで他の四肢骨は保存良好である。横臥屈葬で頭位は東で、この南東部に偏平な丸石が一個検出された。その外、全般的にA12からA15にかけて完形一括土器の出土が多い。特に、A12からA13が完形土器の出土が夥しい。

続いて、貝塚の堆積を調査するためA11から東へ、巾二米×六米の三区、Bトレンチを設置した。このトレンチは予想したとおり、二米を越す深さであり、堆積の状態もAトレンチよりも複雑で、堆積層も多く、Aトレンチよりも年代の新しい堆積層がBⅡ―Ⅲにかけて検出された。

調査目的の一つである住居跡乃至住居面の検討として、Bトレンチを西へ十六米延長して、Cトレンチとし、続いて、A4から西へCトレンチに並行させて、十六米のDトレンチを設けて調査を拡大した。Dトレンチは東へ延長してEトレンチを設置する予定であつたが、調査日数の関係で調査できなかった。

C・D両トレンチ共にAトレンチに近い部分で貝層にあたり、貝塚の周縁を検出することができた。住居跡及び住居面の確認についても調査員等が予想しておつたが、Cトレンチで焼土が二ヶ所検出されただけで、Aトレンチから西方では十五種ほどで凝灰岩地盤に達してしまって残念な

がらたいした成果がなかつた。

したがつて、CトレンチとDトレンチを巾六米で全面剥離して連絡することにした。この結果、Dトレンチよりで貝層が一部とぎれ、この部分より頭位を西南西、一体の仰臥屈葬の人骨が出土、腕を胸で組み、その部分から小玉が二ヶ出土した。

○Aトレンチ　（第三図）

表土は薄く、すぐに混貝層となり、東側では厚い（三十糎）第一貝層が堆積し、混土貝層があつて、十五糎ほどの第二貝層となる。そして、混土貝層から黒褐色土層へと移つて行く。しかし、この第二貝層もA3から北では混土貝層となつて、厚くなり識別が困難になる。その堆積も六十糎に及ぶところさえある。この上部貝層（第一貝層）と下部貝層（第二貝層）の間には堆積の年代を異にしているものと考えられ、その出土土器にも、多少の差異が認められた。陵線を主体とした土器群と沈刻線を主体とした土器群と層位が明瞭になつた。

○Bトレンチ　（第四図）

Bトレンチではトレンチでの上部・下部の二貝層は殆んど、一層となり、識別できなかつた。しかし、この堆積上に約一米五十糎に及ぶ新しい堆積層の混土貝層があり、その内部も約十糎から十五糎の第一貝層と第二貝層が堆積し、この間に十糎程の砂層が間層として堆積し、層位をわけている。

この上部の二つの貝層とそれを含む混土層と、Aトレンチから延長している下部の二貝層（Bでは識別困難）との間には、上部の二貝層が分離できたと同じように、明瞭な時間的な差異を認めることができるのである。

四　出土遺物の概要

整理の現段階では主な出土遺物の概数は次の表になる。

品名	数量	備考
土製品		
○縄文土器	ダンボール箱　42	完形土器19点（昭和42・3・15現在）

○土偶	2	
○有孔円盤状土製品	2	
○土玉	1	
○土錘	73	（土器を研磨整形して円盤状にしたもの）
貝製品		
○貝輪	26	未製品をも含む
石製品		
○石斧	12	
○石鏃	48	
○石錐	6	
○石匙	7	
○凹石	1	
○石製垂飾具	4	内2点小玉で第2号人骨の胸部より出土せるもの
○砥石	1	
○石棒破片	1	
○石剣破片？	1	
○丸石	6	
○打痕・擦痕のある石	11	全部凝灰岩質である。
○その他不明石器	19	
骨角製品		
○釣針	25	内鏃形 2点

品名	数量	備考
○銛	9	
○ヤス（箭）	5	
○骨鏃	5	
○骨針	9	内鳥骨製　1点　針といつてもヘアーピンも含まれている。
○棒状掻器	16	
○骨匕	1	
○垂飾具	7	
○鉋状骨器	1	
○骨刀	1	
○その他不明	32	

人骨　二体分、A11とDの拡張部

A11の第一号人骨は下部層下混土層及び黒土層にかけてであり、時代は縄文式文化中期大木10式に相当するものと考える。

Dの第二号人骨は貝層の切れめ黒褐色土層中であり、縄文晩期大洞A式相当と考えられる。

次にそれぞれについて若干の説明を加えよう。

1　土　製　品

（イ）　縄文土器

各期の編年学的究明を調査の一つの柱であつたのでできるかぎりの精密な検討を行った。

調査の項で説明したとおり、Aトレンチでは上部貝層、下部貝層及び黒土層に分けることができ、その時代の差異を認めることができた。またBトレンチでもAトレンチの層位に新しく第一貝層と、第二貝層を認めることができたのである。以下、下層から順次その特徴の概略を

説明する。

（二）黒土層出土土器群（第五層土器）

いわゆる、繊維土器で大部分は小破片である。口縁部破片からの観察によると、口縁部は外反し、口唇部は外側にそがれて折返し口縁となる。

縄文は単節縄文でR（LLL）が多く、内にR（L L）もみられる。

施文の上部末端には蕨状圧痕が残る特徴を持っており、羽状縄文になるのは僅かである。裏面に条痕のある土器片が一片存在する。

器厚は平均七耗である。この種の土器は黒土層だけでなく、Aトレンチ第二貝層中にも散見する。

（三）下部貝層を中心に出土土器群（第四層土器）（第五図第六図上段）

第五図、第六図上段の3を除いてはこの下部貝層出土の土器群である。

陵線及び刺突文を施文された土器群である。陵線は口縁部突起から下垂して口頸部に一条めぐらされるのが、深鉢形が基本である。（第五図2−9）その下部に第五図2・3・4・6のように突起下部の頸部から胴部にかけて、沈線で囲れた磨消帯が展開し、その磨消帯の連絡部には中期末大木10式に盛行した鰭状の陵帯が残るもの（第五図2・3・4）が特徴的である。もちろんこの鰭状の陵帯は刺突をともなつて口縁部の突起下部に残つていることも特徴である。

また、前者の発展したものと考えられる刺突文だけを口頸部に巡らしたもの（第五図11・12）、及び一条の沈線を巡らしたもの（第六図1・2）もある。

しかし、第五図1のような口縁部から口頸部にかけて口状の磨消帯が陵線で囲まれているのも見られる。

口縁部には突起をもつのが一般的であり、それも四個が圧倒的である。奇数個は少ない。突起のないグループは概して、第五図11・12・第六図1・2のような刺突文や沈線文が単純にめぐらされたものが多いのである。

口縁部は直立か、く字形にになつているものに大別される。

底部は無文が大多数であり、編痕底が多少存在する。葉文底は現在の所僅か2例だけである。

全体的にいつて、このグループは口縁直径の割合に底部大きく、器高も高く、円筒状を呈するものが多い。

縄文施文も撚糸文が多くなる。。単軸絡条体の回転施文である。したがって、施文方向は縦位を示す。又、単節のL（R R）やR（L L）が一般的で

ある。

(三) 上部貝層中心に出土土器群(第三層土器)(第八図下段)

沈線文によつて文様が展開される土器群である。この仲間には前述の陵線が口辺部に残るものもあるが、沈線が線刻が中心となり、過巻や過巻の退化したボタン状の突起や、凹部を中心として磨消手法と沈線の組み合せによつて、胴部へ文様帯が展開するもの(第八図9−11)である。

縄文は細い撚糸文が施文されるのが多くなる。口縁部も粗製土器(縄文施文のみ)では外反し、口頸部に磨消帯のあるものが多い。(第八図13−14)

(四) B第二貝層から第三混土層出土の土器群(第二層土器)(第七図上段)

精製土器・粗製土器の区別があらわれ、縄文だけ施文されたものが全体的にその割合が多くなる。

器形も浅鉢形が多くなり、口縁外反し大波状のものが見られ(第七図1)、磨消手法による入組文があらわれる。

粗土器は焼成・胎土が悪い。口縁部が外反し頸部で稍々しまつたもの、口縁直立しているのと分類でき、特に、口縁外反したものは、口縁部に前述(四)の粗製土器と同じように磨消帯がある。

(五) B第一貝層から第二混土層出土の土器群(第一層土器)(第七図下段)

出土数は多くない。小破片が多い。前述土器群の特徴の一つである精粗の区別はより一層明瞭となり、その上、器型の分化も著しくなる。

精製土器では口縁部は四つの大波状口縁と平縁とに分類されるが、口頸部に数条の縄文帯を巡らし、この平行の縄文帯をS字状沈刻・鰭状枕刻乃至は直沈線で連絡したものか、または、平行縄文帯下部に第七図7のような入組文を有するものが特徴的である。

粗製土器にしても前述(四)の土器と同じように焼成悪く、胎土も砂粒を含むもので良好とはいえない。

深鉢形の土器で無文の土器(第七図10)が発見されたことはこの時期としては珍しいと思う。

以上、概略的であるが、層位順にその特徴を説明したつもりであるが、これから新知見、また細分も可能となることを付記しておきたい。

(ロ) 土偶

一つはA3の下部貝層から出土したもので乳房の下部に三列の刺突文が施文されているのが特徴である。厚さ一・二糎ある。胸部だけ残つたもの。

他はBⅢ第一混土層出土で頭部と左手及び右足が欠損している。中心に一列の刺突文があり、腹部が盛りあがつており、妊婦を示しているのかもしれない。

(ハ) 有孔円盤状土製品

A11は混土貝層出土のものは直径五・三糎、厚さ一・三糎あり、二個の穴が対に存在するものである。

A14は第二貝層出土のものは直径五・一糎あり、厚さは四粍で、裏面は凹状になつて皿状を呈する。前者と同じく一・五糎間隔の二個の穴が対にあるものである。色調は赤褐色である。

(ニ) 土　玉

A13混土層より出土である。二・四糎あり、紐を通す索孔を中心に八本の点刻線がなされ、それに直交する一本の点刻線の施されたものである。表面は非常に粗いものである。

(ホ) 土　錘 (第八図)

土器を円盤状に打ちかいて、それを磨きあげたものである。出土地点、大きさ、重量でまとめたのが次の二表である。大きさは第一表のように直径三糎ー四・五糎が圧倒的に多いこと、重量で見ると第二表では十瓦ー二十瓦の間に集中している。

2 貝 製 品

貝輪で完全品が一個、A14第2貝層出土である。直軸十一・一糎、短軸十・五糎であり、腕に通す穴の部分も直軸六・三糎、短軸五・五糎である。材料は赤貝、ハマグリ、カキ、イタボガキ等である。

3 石 製 品 (第九図)

(イ) 石　斧 (第九図1ー7)

特に6は細身のもので擦切り手法によつたものである。

(ロ) 石　鏃 (第九図9ー33)

大部分がチャート質である。たゞ、33だけが凝灰岩質のものであることが特記すべきことである。

(ハ) 石　錘 (第九図34・35)

（第1表）

地点 / 直径cm	A 1	〃 2	〃 3	〃 4	〃 5	〃 6	〃 7	〃 8	〃 9	〃 10	〃 11	〃 12	〃 13	〃 14	〃 15	B Ⅰ	B Ⅱ	〃 Ⅲ	計
2 cm ～ 2.5		1											1				1②貝		3
2.5 ～ 3	1												1		1				3
3 ～ 3.5	1		1? 1				1 1			1	2	2	4		1	1④混			17
3.5 ～ 4	2								2	1	4	1	2	1	2				15
4 ～ 4.5	1		1							3	1	3	4		2	1④混		1②混	17
4.5 ～ 5									1		2	2		2					7
5 ～ 5.5													2						2
5.5 ～ 6				1				1			1	1			1				5
計	5	1	3	1	•	•	2	2	3	5	10	9	14	3	7	2	1	1	69

……は層位の上下を示す。

（第2表）

地点 / 重量g	A 1	〃 2	〃 3	〃 4	〃 5	〃 6	〃 7	〃 8	〃 9	〃 10	〃 11	〃 12	〃 13	〃 14	〃 15	B Ⅰ	〃 Ⅱ	〃 Ⅲ	計
5 g以下				1									1				1		3
5 ～ 10	1		2				1				2	2	1						9
10 ～ 15	2						1	1	1	1	2	2	5	2	2	1			20
15 ～ 20	1								1	4	4	2	5		4	1		1	23
20 ～ 25	1	1	1						1		1	2	1		1				9
25 ～ 30																			.
30 ～ 35													1						1
35 ～ 40												1		1					2
40 ～ 45																			.
45 ～ 50											1								1
50 ～ 55								1											1
計	5	1	3	1	•	•	2	2	3	5	10	9	14	3	7	2	1	1	69

(ニ) 石　匙（第九図36−43）
(ホ) 凹　石（第九図8）
(ヘ) 垂飾具（第九図48・49）
図の48・49は凝灰岩質のもので、特に48は擦痕が見られる。外に第二号人骨の胸部から出土した小玉二個がある。
(ト) 砥　石
ほゞ菱形を呈し、中心部は擦られたので、凹部になり、擦切れて穴があいている。砂岩質のものが用いられている。二十二糎と十八糎ある。
(チ) 打痕・擦痕のある石器（第九図44・46−48）
この種の石器はほとんど用途は不明であり、その上、凝灰岩を利用していることも特徴である。

4　骨角製器品（第十図）

(イ) 釣　針（第十図18−25・27−29）
下部貝層出土の錨形が特徴的である。図20−25のように釣針の曲りが鋭角になるものと、27・28のように鈍角のものに分類できる。図29のようにBⅡ第二混土層より出土し、外側に逆刺がついたものもある。
一例だけであるがA1第一貝層下より、内側に逆刺のついたものが出土している。
(ロ) 銛（第十図1−28）
銛は形態的には、離れ式と固定式と二つに分類されるが、所謂、離れ式はない。しかし、固定式でも索孔のあることは共通している。そして、ここでも形態の発展が示される。①は図1−3のように脚が細長く鏃のような形態をとるもの、②一方の脚がなくなるか、逆刺の機能を果たすかし、一方が丸味を帯びて、茎となるもの、(中間形態)③図6−8のようにいくつかの逆刺を持ち完全に茎となつたものである。①と②Aトレンチの上部乃至下部貝層出土であるが、③はBトレンチ第Ⅱ混土層出土であり、時間的差明瞭であり、宮戸Ⅱ式併行である。
(ハ) ヤス（篇）（第十図9−12）
これらは銛の仲間に入るが、逆刺及び索孔がないものとして分離した。9は茎のもとにアスファルトが附着しており、12のように茎が片側に

そがれた形態をとつており組合せによつて使用されたものであろう。

（ニ）骨　鏃（第十図13・17）

（ホ）骨　針（第十図30・31）

鹿・猪の四肢骨を縦割にして鋭利に研ぎあげたものである。図31のように鳥骨を二つ割にして研ぎあげたものも存在する。

（ヘ）棒状掻器（第十図32ー35）

鹿角を縦割りして棒状に磨きあげたものである。

（ト）垂飾具

鹿角等を用い索孔をもつた垂飾具である。

（チ）筬状骨器（第十図26）

A13下部混土層より出土である。

（リ）骨　刀（第十図36）

長さ四十二・五糎あり、稍々そりがある。BⅢ第三混出土である。

五　考　察

調査の概略で説明したように、種々の課題・検討しなければならない問題があるが、今回の調査では編年学的研究と生活単位の住居に焦点をしぼつたので、この二点についてと、その他若干のことについて考察を深めよう。

私たちが調査した範囲では、調査の結果層位は五つ確認することができた。

最下層のAトレンチ黒土（Bトレンチ最下部も同じ）層は繊維混入の土器で縄文施文で蕨状の結束の圧痕など、器形から考えて、縄文前期初頭上川名Ⅱ式大木Ⅰ式あたりに併行する遺物であろう。①しかし、多少の違いが見られ、あるいは条痕施文などが上川名Ⅱ式に先行するかと考えられるが、遺物数が少ないので残念ながら不明である。しかし本貝塚として縄文式文化前期の遺物を検出したことは、松島湾内縄文前期の文化を解明する手懸りとなろう。

続いて、Aトレンの下部貝層は縄文中期大木10式に併行し、上部貝層は器形、文様施文から見て宮戸I式(2)に比定されるもので関東での堀之内式に併行するものである。

宮戸I式を設定する段階では、資料の不足等から稜線(降線)施文土器(第一群)と線刻渦線文施文土器(第二群)と細分して説明し、層位的には同時期と考えなければならないが、型式的発展から考えて第一群から第二群へと発展するのではないかという憶測にとどまつていたが、Aトレンチの層位的に判然と区別出来るようになつたことから、宮戸I式の細分が確実になつたことである。それは今までの宮戸I式の第一群土器は、縄文中期大木10式に併行するものとして把握しなければならないことが判明した。しかし、この下部貝層出土の土器群は少なくとも、大木10式でも新しいものとして考えなければならないと思う。

また、宮戸I式が陸前地方後期初頭の位置づけとしては内容把握が不充分であるとし、宮戸I式に先行するものとして袖窪式なる型式を設置された(3)。このことについては、前述もしたが、あの段階では不充分であつたことは否定しない。宮戸I式に先行する土器群の存在については前々からの私の持論であつたことである。しかし、まとまつた資料、発掘資料がなかつたので言及しなかつたまでである。

ところでこの袖窪式なる型式名は袖窪囲出土の土器に冠されたものであるが、私はこの袖窪出土の土器で宮戸I式に先行すると考えられる土器は極く僅かであつて、その好資料の大部分は有名な頭なし人骨周辺から出土したものが多いことである。こんなことから、袖窪式と宮戸I式の先後関係を云々するよりも、宮戸I式より先行する土器群の諸特徴及び一型式と分離設定できるものであるかどうかということが問題であろう。

続いて、Bトレンチで確認された二つの層位は出土土器の諸特徴から、宮戸II式に比定される。第一貝層から第二混土層までの土器群はまさしく、今までの内容把握からすると宮戸II式に比定されるが、第二貝層から第三混土層までの土器群は宮戸II式の内容からするとはみ出てしまう。それでは宮戸I式と宮戸II式の中間かというと、宮戸II式に近いもののようである。それは伴出の粗製土器に問題がある。Aトレンチの上部貝層の沈刻線文系に属する粗製土器群の器形、施文及び磨消手法が強く影響していることである。こんなことから、将来、宮戸II式の細分に大きな手がかりとなると考えられる。

生活単位の住居址の検討では労力、時間をさいた割合に期待される成果なく失敗であつた。

焼土の検出によつて当時の生活面であつたことが立証されたが、これが即ち、住居面であるかというと疑問である。

何故に東北地方だけが後期の住居址の発見例が少ないのだろうか。松島湾内の後期の貝塚は、七ヶ浜町二月田貝塚、宮戸島貝塚それに西ノ浜貝塚と規模が大きく、その範囲は現在の部落より大きいものさえある。

何か発見に困難な要因があると考えられる。

それは炉址が発見されてもそのプランが不明な理由は、①は他地域の住居址のように側壁が深くなかつたか、②住居址床上の施設なども関連していることかだろう。(4)それに、意識的に住居址を検討するための調査がなかつたのではないだろうか。今後の遺跡調査の課題だろう。編年学的研究の補助的材料として銛の型態発展がある(5)こと。茎を持つようになる銛は宮戸Ⅱ式以降であることもその一つである。

今回の調査で特徴的に発見されたものに土錘がある。(6)土器片を打ちかえて円く磨きあげたものである。この用途については種々の意見があるようだが、大きさは三糎から四糎ほどに集中し、重量も十瓦から二十瓦が多いことも何か規格性を見だすことができる。糸をかける施設もないものばかりで魚撈具というだけでなく、用途については再吟味の要はないだろうか。

註

(1) 加藤　孝　「宮城県上川名貝塚の研究」宮城学院研究論文集Ⅰ(昭26)

(2) 後藤勝彦　「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について」考古学雑誌四十八巻第一号(昭37)

(3) 林　謙作　「縄文文化の発展と地域性ー東北ー」日本の考古学Ⅱ縄文時代(昭40)

(4) 「(3)に同じ」

宮戸島台囲地区TLトレンチにおいて柱穴を二ヶ検出したが壁面をおさえることも出来ず、プランも把握することが出来なかつた。これはトレンチ調査の欠陥であろう。

(5) 林　謙作　「前掲書」

後藤勝彦　「宮城県宮戸島里浜台囲貝塚の研究」宮城県の地理と歴史Ⅰ(昭31)

(6) 吉田　格　「横浜市称名寺貝塚発掘調査報告」東京都武蔵野郷土館調査報告書Ⅰ

ここでは、糸かけのついた土錘にまじつて、本貝塚出土の土錘なるものがまじつているようである。

六　あとがき

今回の調査で①陸前地方縄文文化中期大木１０式から縄文文化後期の土器編年が更に細分化できることが確認された。②生活面特に、住居址の検討には組織的、継続的に実施されなければならないことを痛感させられた。そして、保護のむずかしい西ノ浜貝塚のような重要な貝塚は計画的にこれから継続して調査を実施しなければならない。

今後は松島湾内一つ一つ遺跡の保護でなく松島湾内遺跡全体の指定を考えて行かねばならないと思う。　（文責　後藤・斎藤）

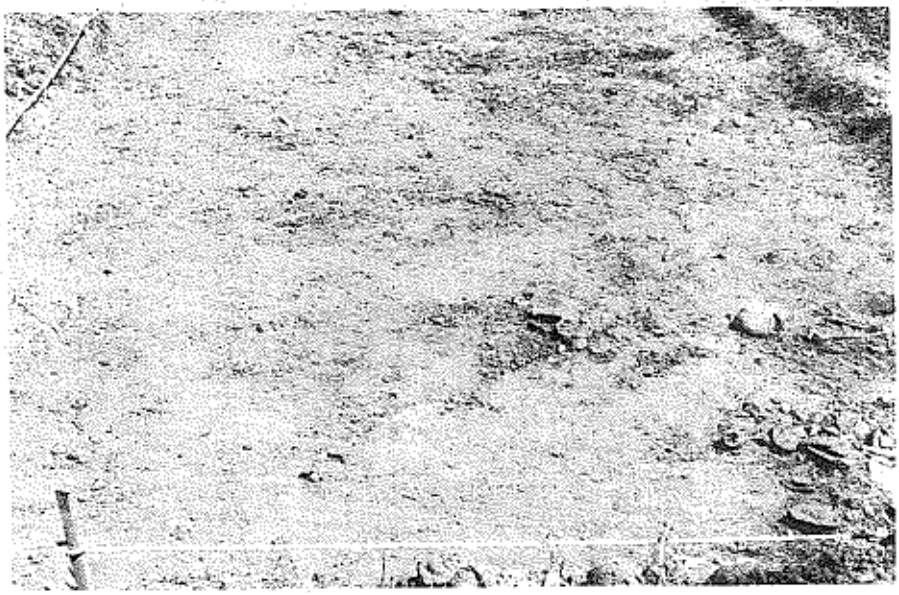
付　記

Bトレンチ断面図、第六図下段、第七図は斎藤良治、原図によるものであり、Bトレンチの整理は斎藤良治によるものである。したがってBトレンチについての調査概要、出土土器の概要、出土土器の考察のBトレンチ分については、斎藤良治の原稿で意見調整して、記載したものである。

Aトレンチ A8地区東壁貝堆積状態

Bトレンチ BⅡ－Ⅲ地区南壁貝堆積状態

Aトレンチ A13～15地区の土器の出土状態



C.Dトレンチ間全面剝離した状態
（右手前は2号人骨，遺跡中間部に貝層の切れめが見える）

Aトレンチ A13の一括遺物の出土状態

Aトレンチ A12 地区の夥しい一括土器の出土状態

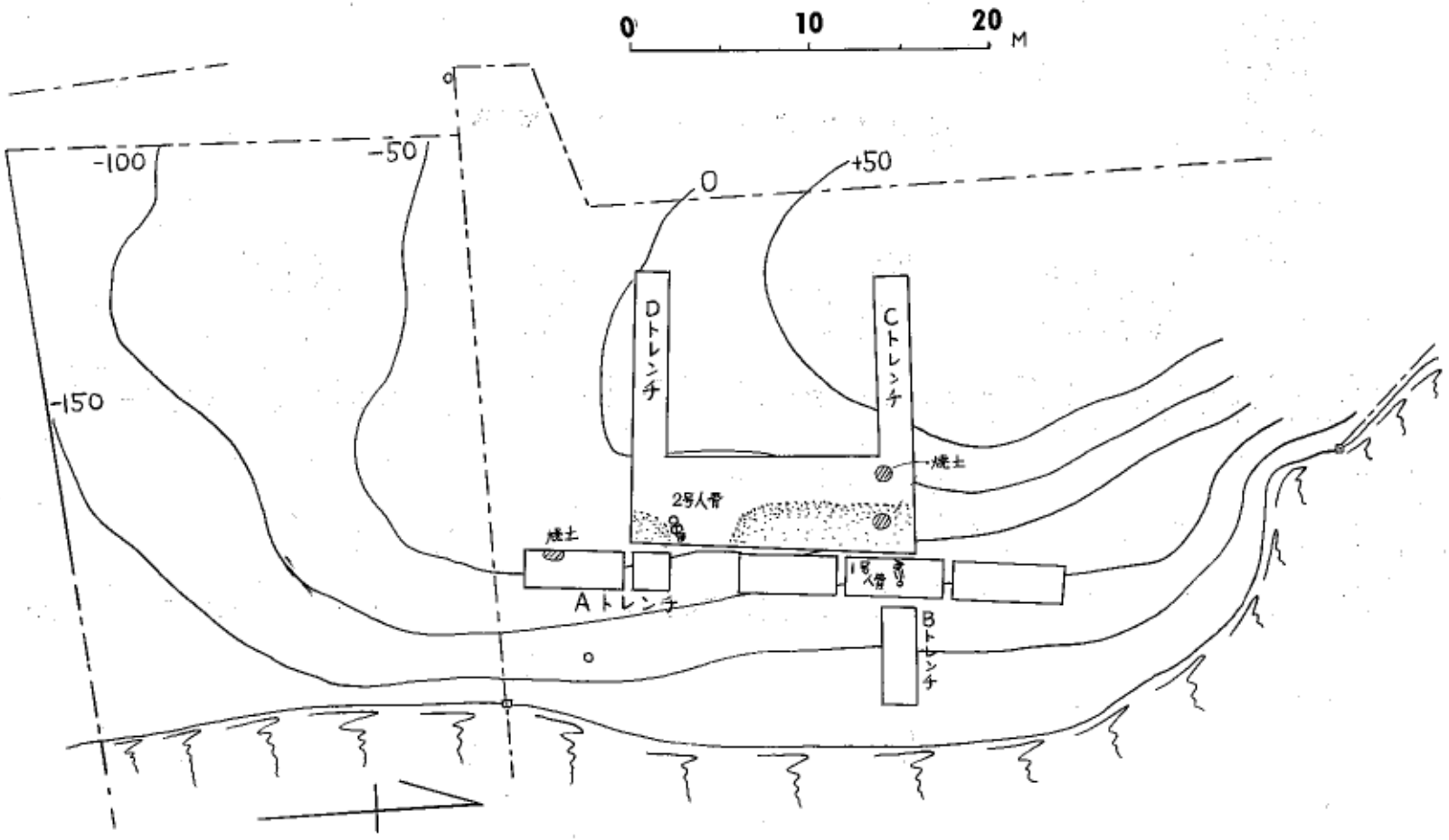
Aトレンチ A11 地区 1 号人骨の出土状態

2 号 人 骨 の 出 土 状 態
（腕組みのところに小玉2ケが見える）

BトレンチⅢ地区の土偶出土状態

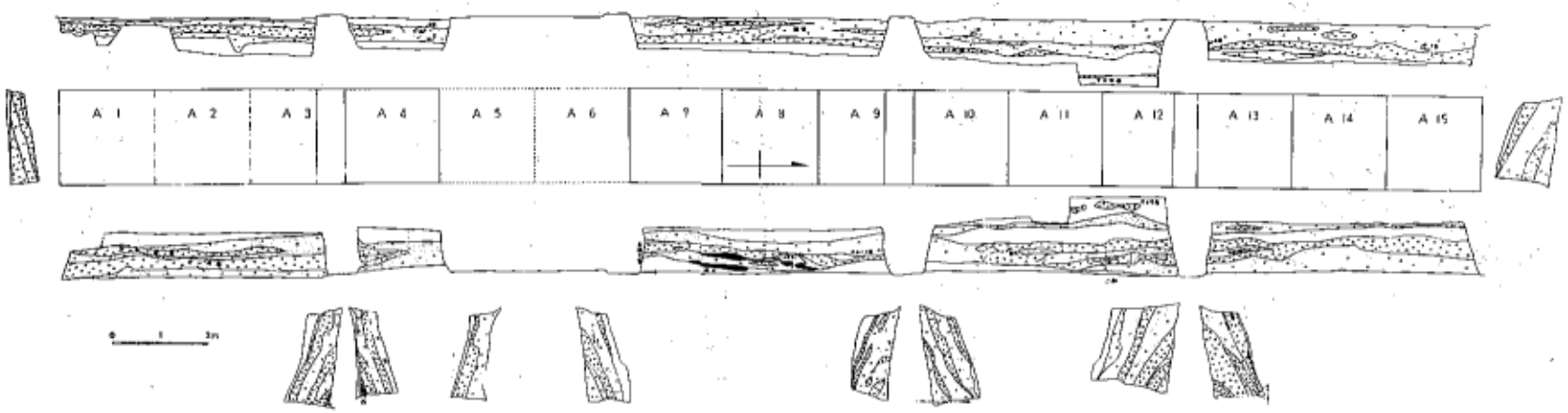
第一図　西ノ浜貝塚附近図

（松島：5万）

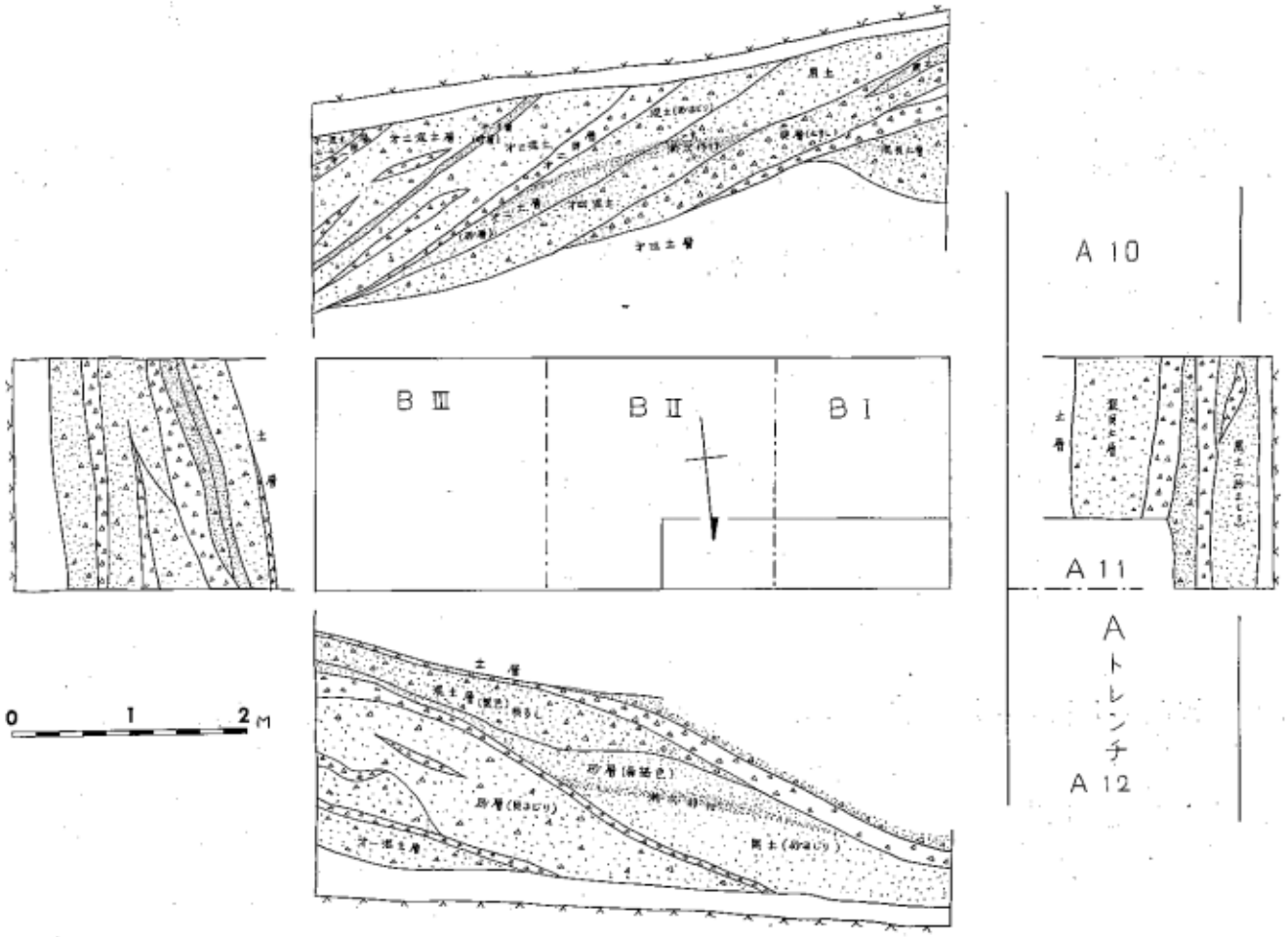


第二図　発掘地域の平板実測図

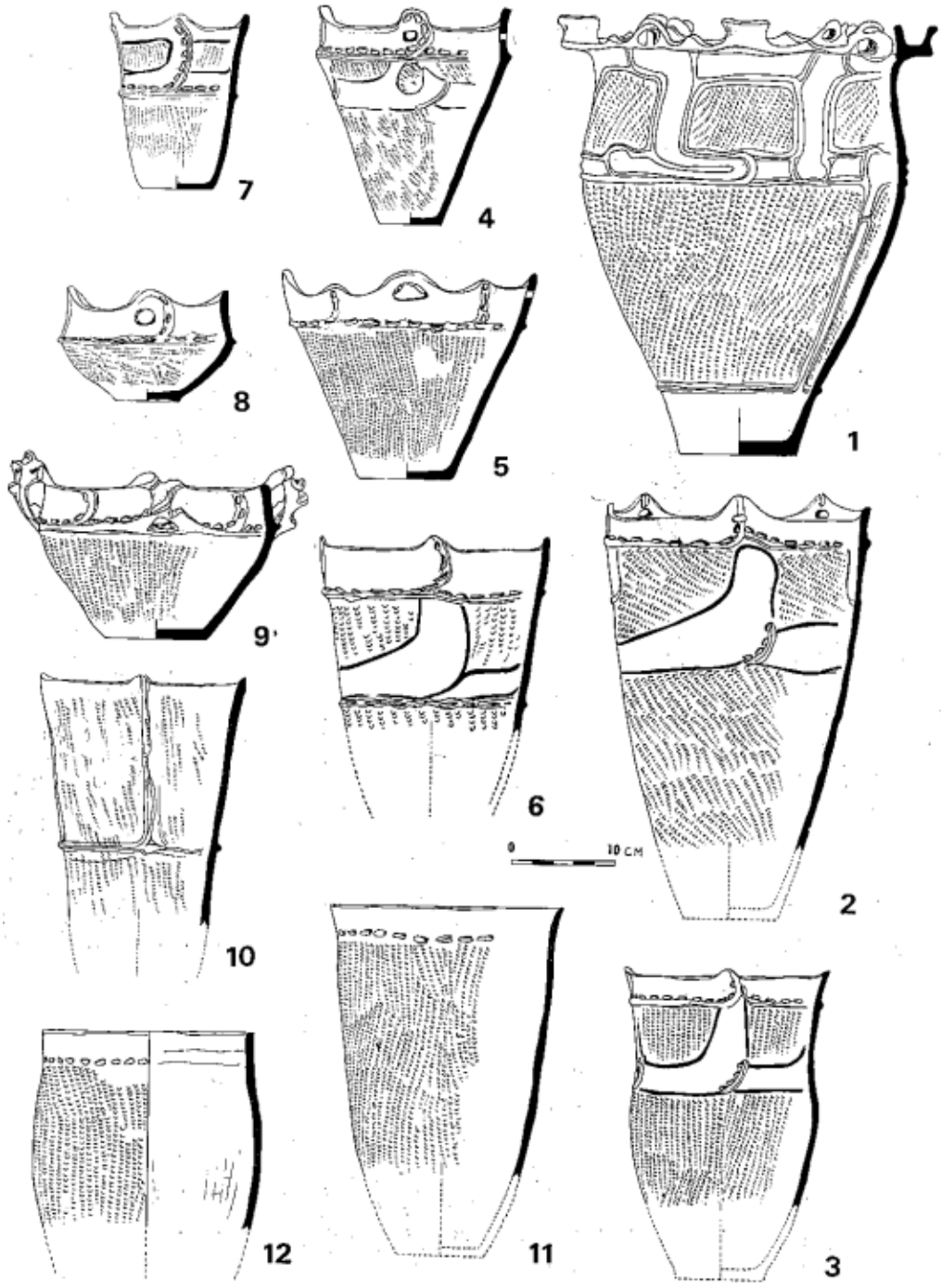
〔250：1〕



第三図　Ａトレンチ断面実測図



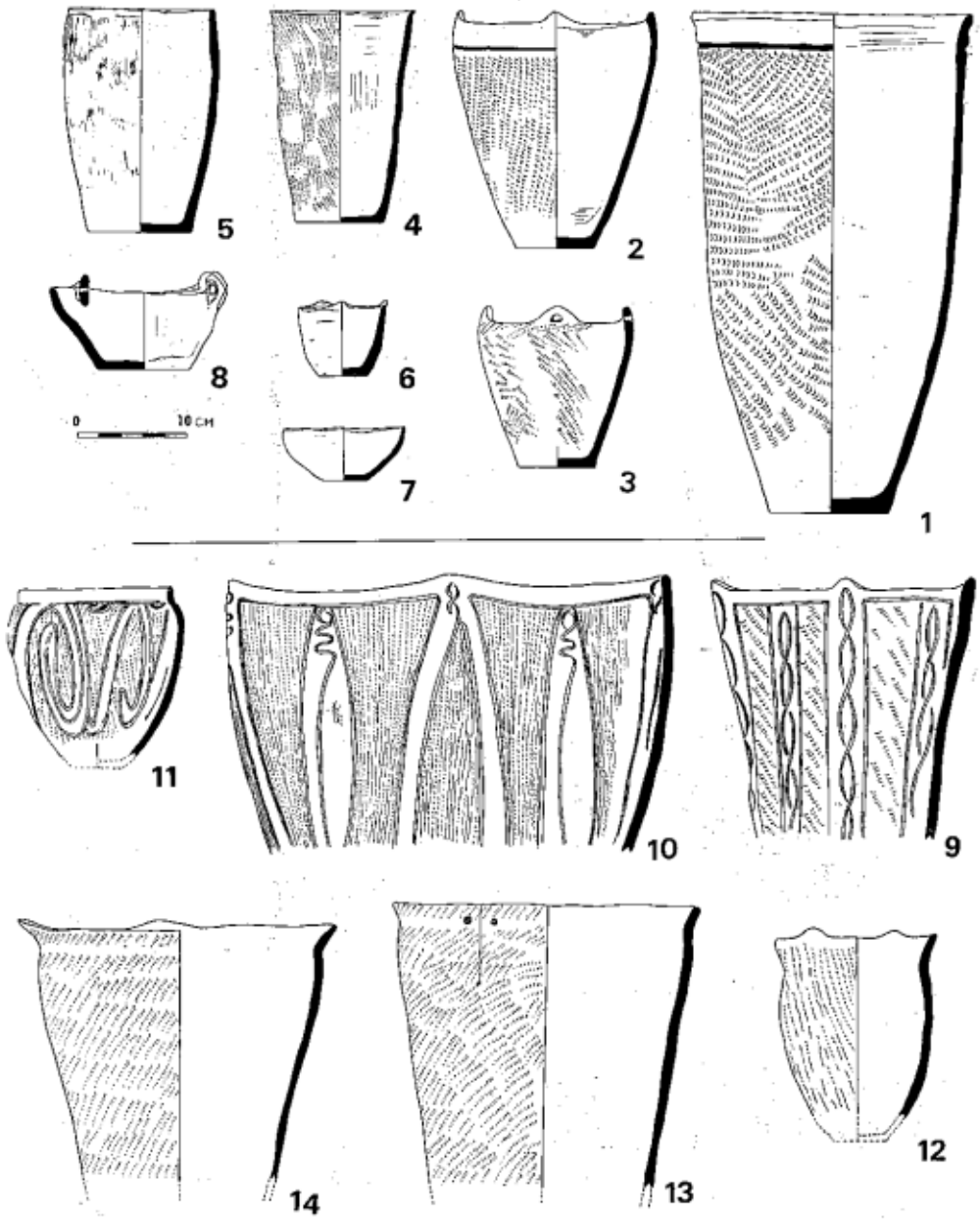
第四図　Ｂトレンチ断面実測図



第五図　西ノ浜貝塚第四層出土土器実測図

〔下部貝層出土土器群〕

1, 3, 5, 6, 8, 12 (A14), 2, 4 (A12)
7, 9 (A15), 10 (A10), 11 (A13)

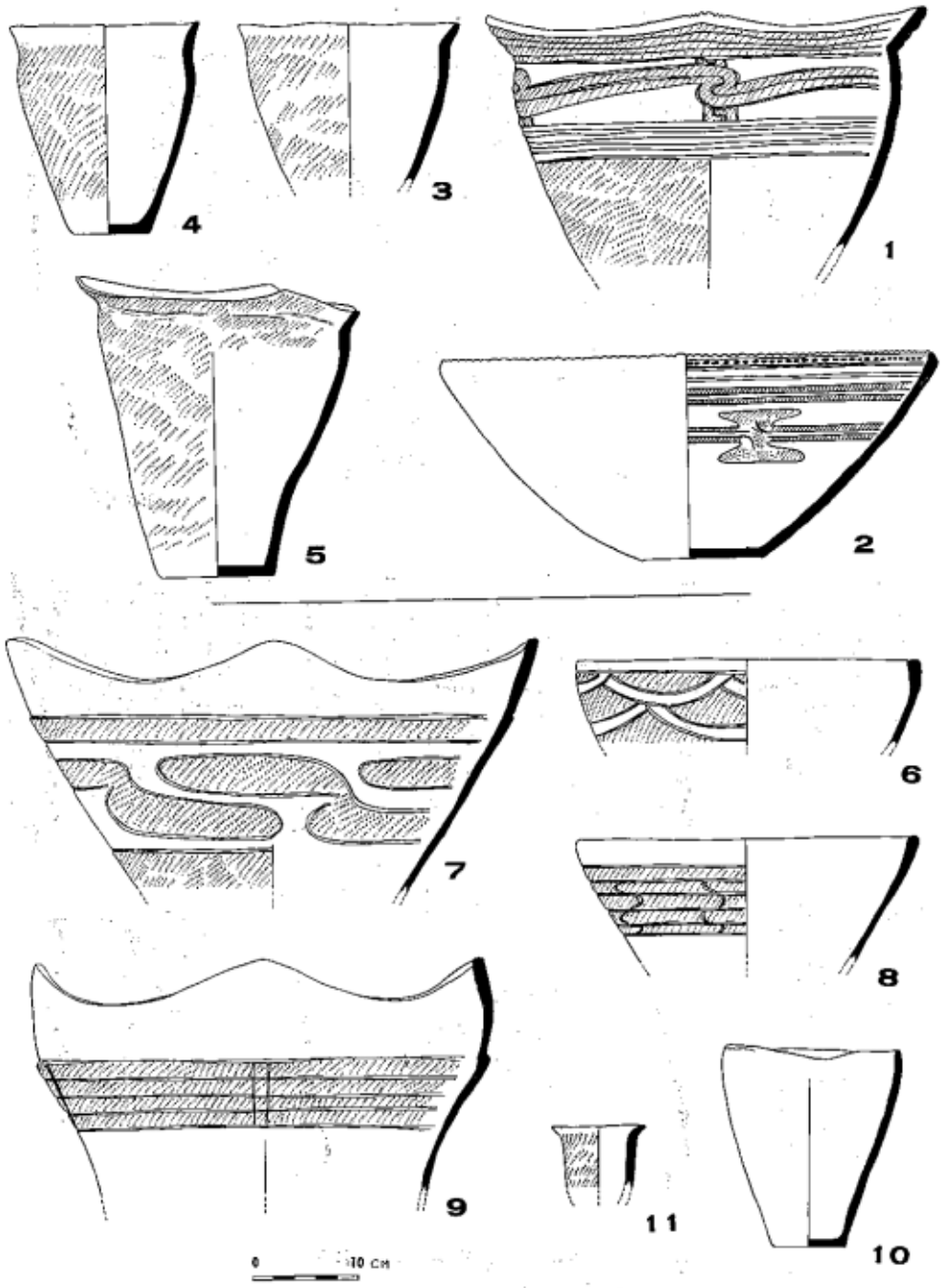


第六図　西ノ浜貝塚第４層及び第３層出土土器実測図

〔下部貝層及上部貝層出土土器群〕

第４層　上段３を除いて全部　1, 4, 6 (A12)
2 (A13)

第３層　下段及上段３　5 (A11), 7 (A15)
3 (A 8)　8 (A 9)
9—14 (B 4混)



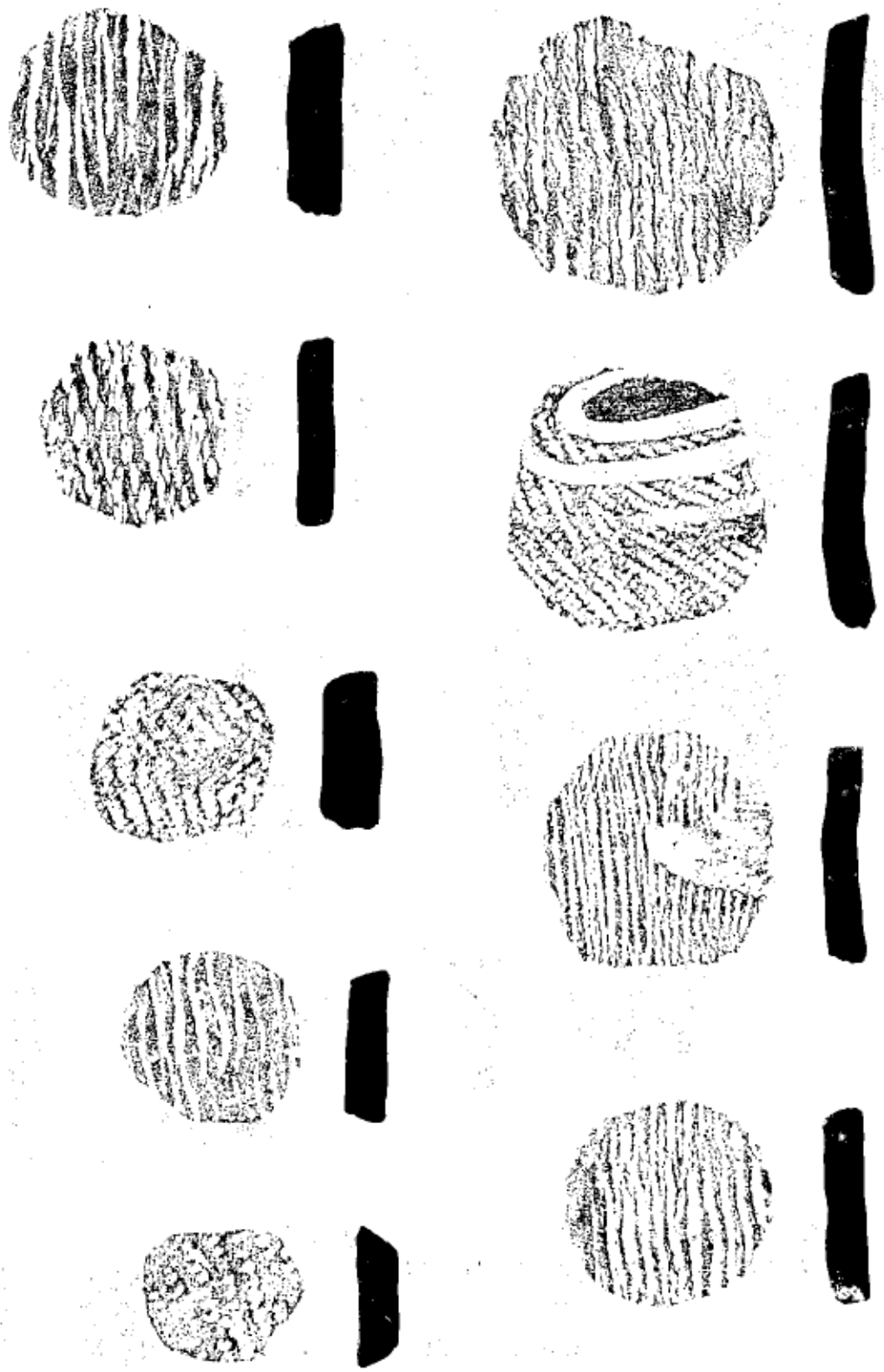
第七図　西ノ浜貝塚第２層及第１層出土土器
実測図

〔第一貝層並びに第二貝層中心出土土器群〕

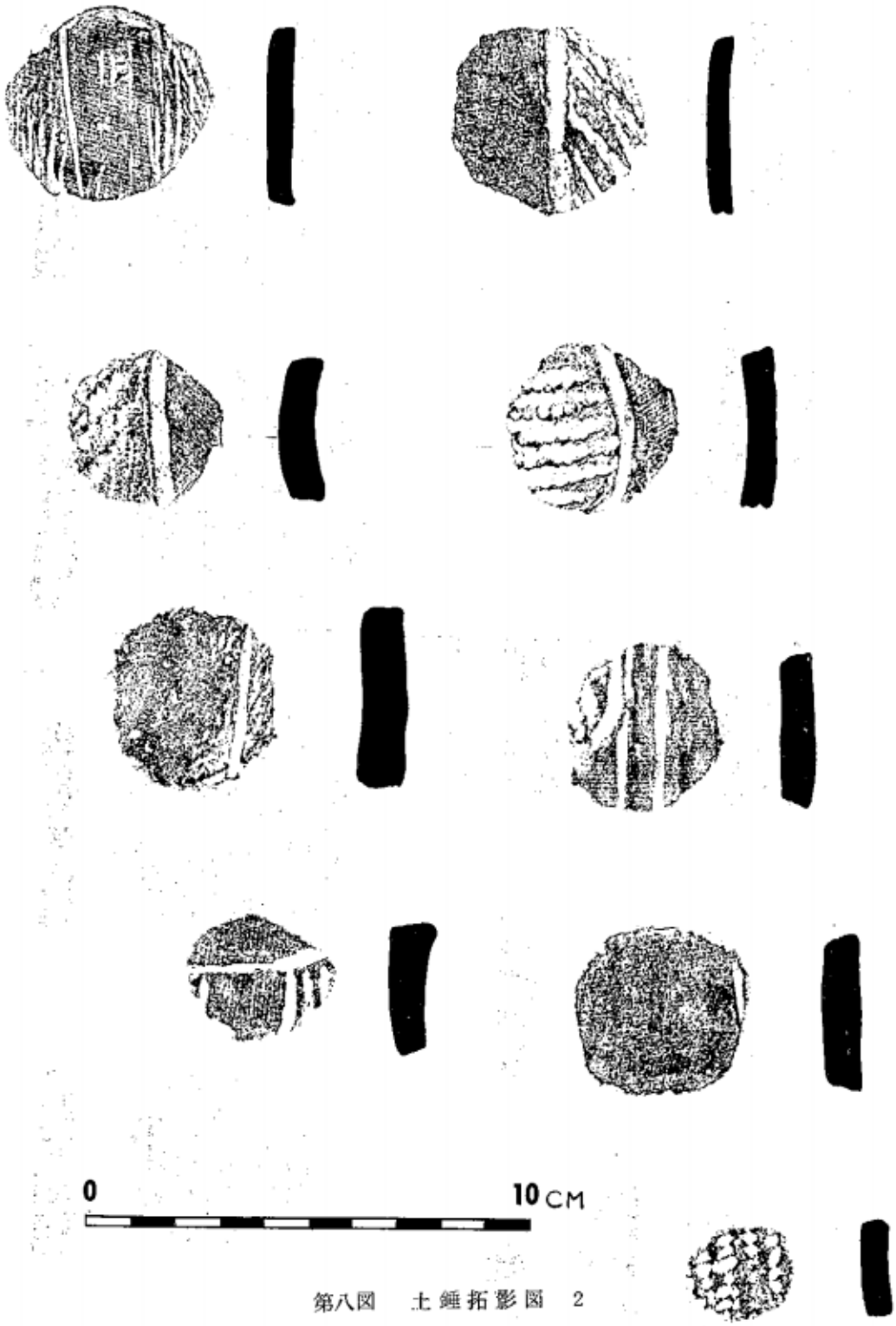
第2層　上段1, 2（B 2貝）, 3, 4（B第2土）

第1層　下段5（B第3混）

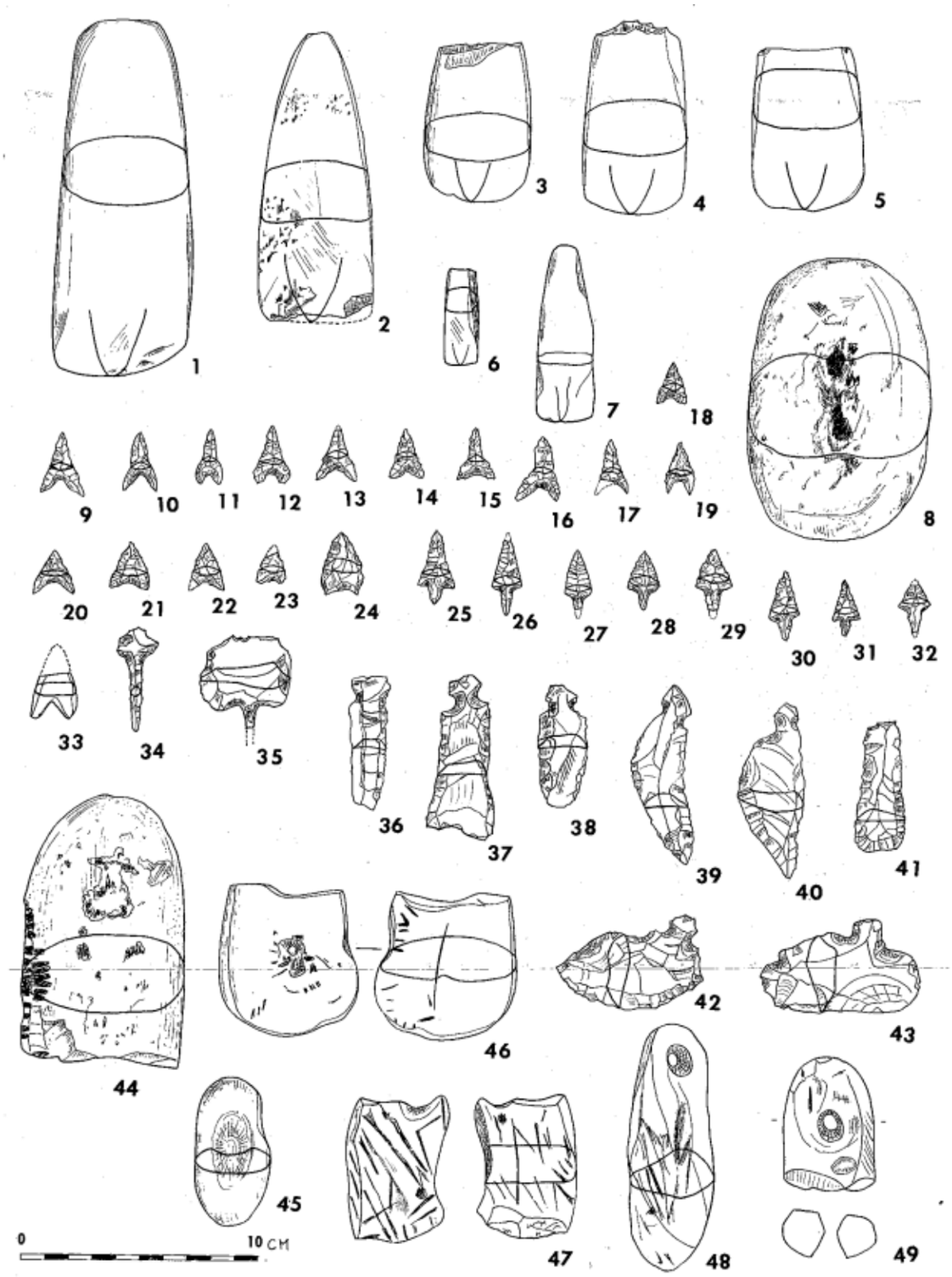
6－11（B 第2混）



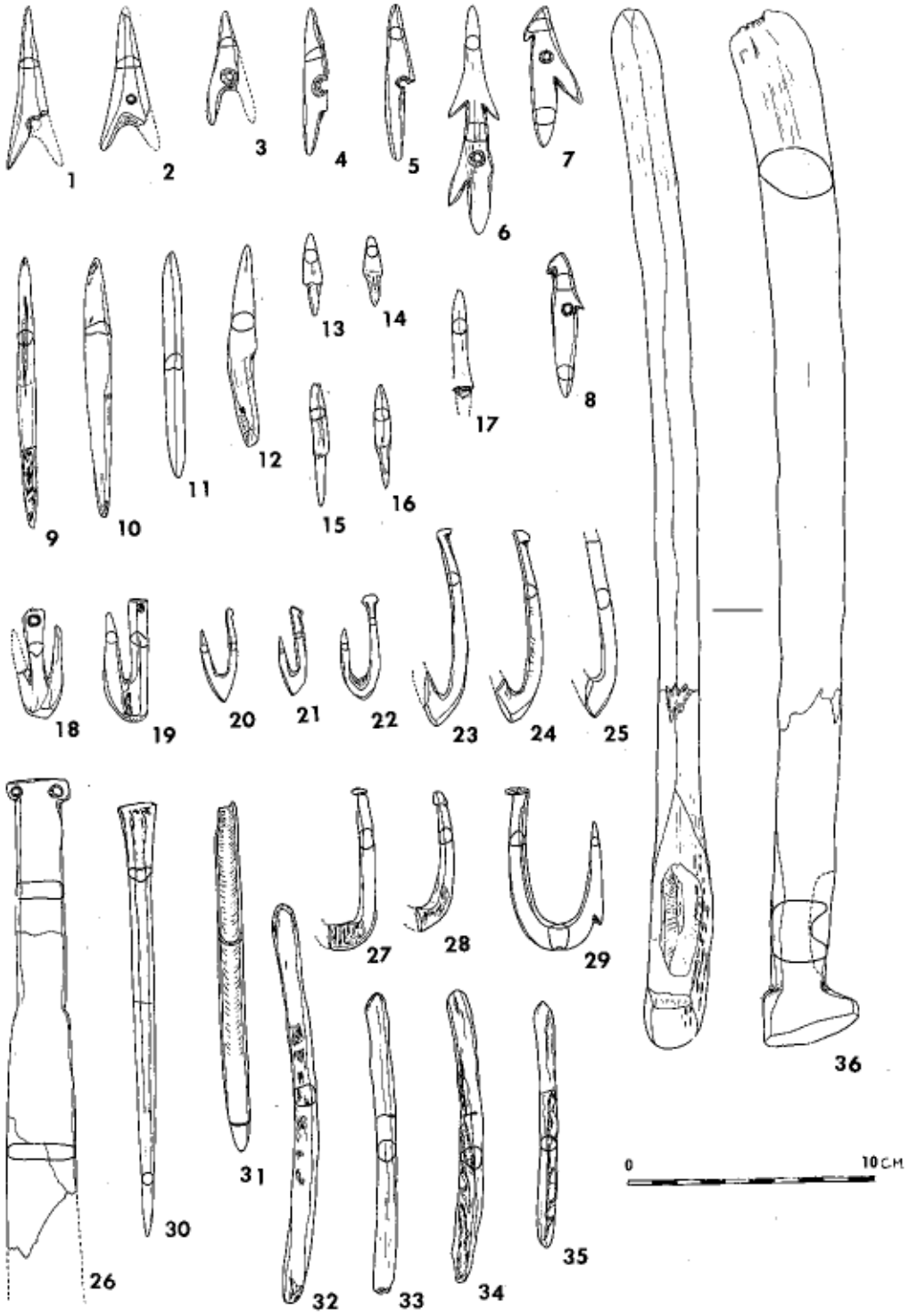
第八図　土錘拓影図　1



第八図　土錘拓影図　2


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
0
10 CM

第九図　石製品実測図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
0
10CM

第十図　骨角製品実測図

Ⅱ　西ノ浜貝塚緊急調査（測量調査）概報

一、遺　跡　名　宮城郡松島町磯崎字西ノ浜所在貝塚

二、調　査　期　日　自　昭和四十一年十月三日

　　至　昭和四十一年十月三十日

三、調　査　者　宮城県教育委員会

四、調　査　担　当　松島町（町長　伊藤政治）

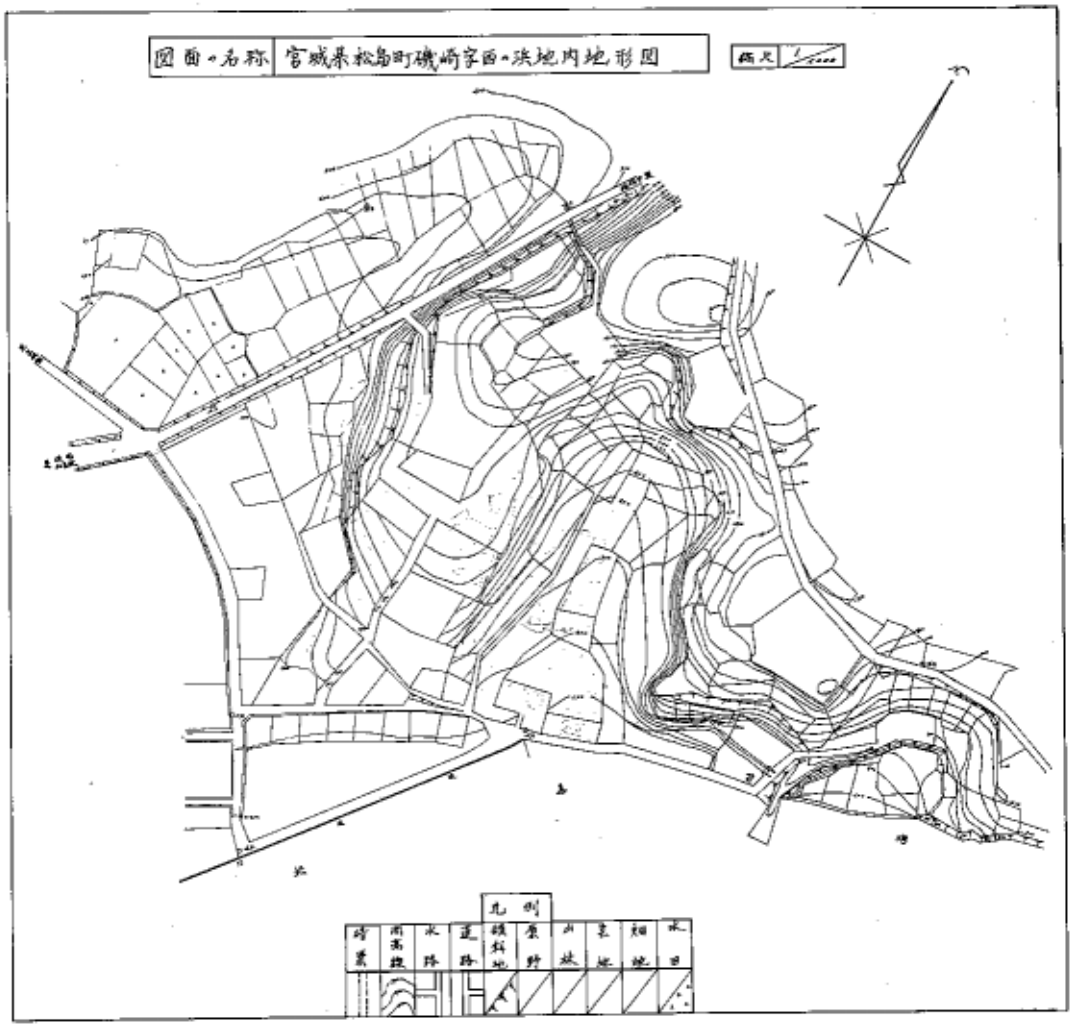
五、調　査　概　要

当遺跡は、Ⅰ、西ノ浜貝塚緊急発掘調査概報のとおり、緊急発掘調査を実施したが、開発の進展とともに破壊されゆく同遺跡の所在を確認し、記録保存のため、発掘調査に引続き測長調査を実施し、別図のとおり縮尺千分の一の実測図を作製した。

本調査は、松島町と委託契約のうえ実施したもので、調査に当られた松島町関係者のご協力に対し感謝申し上げます。

付　記

貝散布範囲については、後日本図に記入作成のうえ報告する。


図面の名称
宮城県松島町磯崎字西の浜地内地形図
縮尺
凡例
背景
用高線
水路
道路
鎮守地
原野
山林
畑地
水田